

|          |             |           |               |     |             |
|----------|-------------|-----------|---------------|-----|-------------|
| 作家名      | えんどうあきこ     | 作品名       | かなたへ          |     |             |
|          | 遠藤彰子        |           | 彼方へ           |     |             |
|          | ENDO, Akiko |           |               |     |             |
| 生没年      | 1947-       |           |               |     |             |
| 出生地      | 東京都         | 作品名<br>補足 |               |     |             |
| No Image |             | 制作年       | 2017 年        |     |             |
|          |             | 技法<br>材質  | 油彩、キャンヴァス     |     |             |
|          |             | 寸法        | 162.0×162.0cm |     |             |
| 取得方法     | 寄贈          | エディション    |               |     |             |
| 選定年度     | 令和 6 年度     | 号数        | S100 号        | 評価額 | 4,000,000 円 |

## 作家略歴

1947 年、東京都生まれ。神奈川県在住。大学卒業後、本格的に画家を志し、神奈川県にアトリエを構える。自然豊かな環境から着想を得た「楽園シリーズ」が女流画家協会展で受賞し、画家としてデビューを果たす。その後、モチーフを重層的に配置し、複雑に構成した「街シリーズ」の代表的作品である《遠い日》によって、1986 年に安井賞を受賞し、現代を代表する画家としての地位を確立する。1989 年以降は、代表作《みつめる空》をはじめ、500 号(約 2.5×3.3m)を超える作品を制作。人、建造物、植物や大樹など数多のモチーフを隅々まで配置し、エネルギーに満ちた作品世界を築いている。

1969 年、武蔵野美術短期大学卒業。  
1986 年、安井賞受賞。同年、文化庁芸術家在外研修でインドに滞在。  
2007 年、芸術選奨文部科学大臣賞(美術部門)受賞。  
2011 年、第 5 回北海道現代具象展に招待作家として出品。同年、札幌大谷大学短期大学部美術科(現・札幌大谷大学芸術学部美術学科)特別講師として招聘。  
2014 年、女性画家として初の紫綬褒章受章。  
2023 年、毎日芸術賞受賞。  
現在、武蔵野美術大学名誉教授、二紀会理事、女流画家協会委員を務める。

## 特徴

馬とともに駆け巡る人々の姿が賑やかに描かれている一方で、中心に描かれた女性が星空に向かって手を広げ悠然と歩みゆく姿が印象的であり、動勢を感じさせる幻想的な世界を構築している。画面中央の赤い服をまとった女性像は遠藤の母親がモデルであり、逝去したときの体験をもとに描かれた。女性が星空に浮かぶ馬のシルエットへ向けるまなざしからは、母親への深い愛情と哀悼の意が感じられる。本作は、333.3×497.0cm(500 号 2 枚組)の大作《炎樹》をはじめとするシリーズ作品を中心に発表していた 2017 年に、約 1 カ月をかけて制作された。1977 年以降の「街シリーズ」に見られる曲線的に配された建造物や寄り添う人々が本作でも描かれており、遠藤作品に特徴的な躍動感あふれる構図が採用されている。

当館における同作家の収蔵は初となる。本作は戦後次第に大画面化していく日本の現代絵画界の一側面を示すとともに、作家の技量が存分に示された良作でもあり、収蔵にふさわしいと考えられる。

|          |                   |           |             |     |         |   |
|----------|-------------------|-----------|-------------|-----|---------|---|
| 作家名      | くにまつのぼる           | 作品名       | ひょうじん       |     |         |   |
|          | 国松登               |           | 氷人          |     |         |   |
|          | KUNIMATSU, Noboru |           |             |     |         |   |
| 生没年      | 1907-1994         |           |             |     |         |   |
| 出生地      | 函館市               | 作品名<br>補足 |             |     |         |   |
| No Image |                   | 制作年       | 制作年不詳       |     |         |   |
|          |                   | 技法<br>材質  | 油彩、キャンヴァス   |     |         |   |
|          |                   | 寸法        | 31.7×41.0cm |     |         |   |
| 取得方法     | 寄贈                | エディション    |             |     |         |   |
| 選定年度     | 令和 6 年度           | 号数        | 6 号         | 評価額 | 180,000 | 円 |

## 作家略歴

1907 年、北海道函館区鶴岡町(現・函館市大手町付近)に生まれる。1914 年、函館大火のため一家で小樽に移る。1924 年以降、1937 年まで東京と小樽を行き来しつつ画家として歩み始める。1927 年、東京で二科会会員の赤城泰舒に師事、水彩画を学ぶ。1929 年には三浦鮮治が主宰する小樽裸童社洋画研究所で、翌 1930 年には東京の本郷洋画研究所でデッサン等を学ぶ。1932 年、北海道美術協会展(道展)に初入選。1933 年、独立美術協会展に初入選、北海道独立美術作家協会の創立会員になる。1935 年、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)西洋画科に入学、1939 年卒業。1940 年から 45 年にかけて従軍画家として満州、朝鮮、択捉島、国後島にわたる。1951 年ごろからは「目のない魚」シリーズ、1960 年頃からは「氷人」シリーズを制作し、その作風は北方的、ロマン的と形容され豊かな詩情をたたえるものと評されてきた。1985 年、「風磨の心象—国松登展」開催(北海道立近代美術館、東京セントラル美術館)。受賞歴としては 1959 年に北海道文化賞(芸術部門)、1976 年と 1986 年に紺綬褒章、1979 年に瑞宝章を受ける。

## 特徴

国松の画業を代表する「氷人」シリーズの一作。同シリーズは、1960 年頃に根室で流水を見て得た印象をきっかけに手がけられ、氷上を舞台に展開する人や動物の営みが深い青と冴えた白の対比の中に描き出される。本作には、4 人の人物と 1 頭の白い馬が描かれる。馬上の 2 人は頭を寄せ合い、まるで一体であるかのように穏やかに佇む。もう 2 人は、雪と氷で形作られた背もたれのある椅子に座し、互いの方へ絶妙に寄せられた身のひねりや顔の角度により、対話するような雰囲気醸し出されている。

1965 年に制作された別の《氷人》(真狩村教育委員会蔵、『国松登展(1995 年当館開催)』に掲載)、及び当館既蔵の同タイトル作品(1971 年)は本作と構図、モチーフともに類似しており、1960 年代から 70 年代にかけて描かれた可能性がある。椅子に座す 2 人の人物のほか、画面下部の三分の 1 程度を氷の面とし、その奥に暗く沈んだ海、さらに向こうに流水を配置する表現についても、共通する点が認められる。

本作は比較的小品ながらも「氷人」シリーズの優れた特質をそなえ、当館既蔵の同シリーズコレクションを充実させるものと考えられる。

|          |                |           |             |     |           |
|----------|----------------|-----------|-------------|-----|-----------|
| 作家名      | あおのあまなつ        | 作品名       | August      |     |           |
|          | 蒼野甘夏           |           | August      |     |           |
|          | AONO, Amanatsu |           |             |     |           |
| 生没年      | 1973-          |           |             |     |           |
| 出生地      | 新篠津村           | 作品名<br>補足 |             |     |           |
| No Image |                | 制作年       | 制作年不詳       |     |           |
|          |                | 技法<br>材質  | 紙本彩色        |     |           |
|          |                | 寸法        | 72.7×72.7cm |     |           |
| 取得方法     | 寄贈             | エディション    |             |     |           |
| 選定年度     | 令和 6 年度        | 号数        | S20 号       | 評価額 | 700,000 円 |

## 作家略歴

1973 年、北海道新篠津村生まれ。北海道女子短期大学ではグラフィックデザインを学び、1993 年の卒業後は小学校教員やイラストレーターを務めた。30 歳を過ぎた頃から、独学で日本画技法を学び、作品制作を開始。2009 年の北海道美術協会展(道展)に初出品し、新人賞を受賞した。2011 年、第 30 回損保ジャパン美術財団選抜奨励展秀作賞受賞。2013 年、「札幌美術展 アクアライン」(札幌芸術の森美術館)出品。同年、道銀芸術文化奨励賞受賞。2018 年、「蒼野甘夏日本画展 夢と、あこがれと、強さ」(神田日勝記念美術館)。2019 年、北海道文化奨励賞受賞。2022 年、中島潔展特別企画「令和の未来は女性が創る。」(佐賀県立美術館)。

## 特徴

本作では海水浴を楽しむ女性が描かれる。女性は水着姿の上半身のみ描かれるが、周囲にタコの足が見られることから、水中にあるはずの彼女の下半身はタコであろうと想像できる。

蒼野は日本画の伝統的な技法を用い、その文様や様式などもベースとして 2012 年頃から女性像を描いてきた。その主題は古来の伝説等に着想を得ながらも、現代的なデザイン感覚によってよりスタイリッシュに表現される。本作においては、漆地に金の菊模様をあしらったゴーグルや複数の花紋が配された浮き輪などに日本文化の伝統的なデザインを踏襲していることがうかがわれる。加えて、タコの吸盤や透き通る薄い布の質感など、細部においてリアルさが追究され、非現実的なモチーフの選択にもかかわらず、画面全体が破綻なく構成されている。

当館における同作家の収蔵は本年度が初となる。日本画の新たな側面を推し進める作家として着実に評価を得てきた北海道出身・札幌拠点の地域作家であり、収蔵にふさわしいと考えられる。

|          |                  |           |                     |     |             |
|----------|------------------|-----------|---------------------|-----|-------------|
| 作家名      | ひらぬまみゆき          | 作品名       | こうみょうこうごうず          |     |             |
|          | 平沼深雪             |           | 光明皇后図               |     |             |
|          | HIRANUMA, Miyuki |           |                     |     |             |
| 生没年      | 1898-1960        |           |                     |     |             |
| 出生地      | 札幌市              | 作品名<br>補足 |                     |     |             |
| No Image |                  | 制作年       | 1919 年              |     |             |
|          |                  | 技法<br>材質  | 絹本彩色                |     |             |
|          |                  | 寸法        | 178.5×209.0cm(二曲屏風) |     |             |
| 取得方法     | 寄贈               | エディション    |                     |     |             |
| 選定年度     | 令和 6 年度          | 号数        |                     | 評価額 | 3,500,000 円 |

## 作家略歴

1898(明治 31)年、札幌生まれ。長兄・半澤洵の妻・美加の実家である平沼家の姓を継ぎ、平沼深雪を名乗る。庁立札幌高等女学校卒業後、東京女子美術学校に学び、吉村忠夫(松岡映丘の弟子で日本画院を創設、正倉院御物をはじめ古典工芸の研究を以て知られる)に師事。  
1919(大正 8)年に女子美術学校を卒業後、郷里に戻り北海道庁立札幌高等女学校の美術教師を務めた。  
1925(大正 14)年、道展の創立に女性としてただ一人参加する。  
1935(昭和 10)年、埼玉県越谷へ移住。  
1960(昭和 35)年、逝去。

## 特徴

1919(大正 8)年、平沼深雪 21 歳の作。同年 7 月に京都・奈良を旅行し、正倉院を訪ね《鳥毛篆書屏風(模造)》などに取材して制作した。1919 年の画帖に下絵が残されており、画帖等 8 点も資料として収蔵する。聖武天皇の遺愛品で、後の光明皇后が献納した正倉院宝物《鳥毛篆書屏風》(8 世紀)は、1878(明治 11)年、パリ万博に出品するため博物局により模造が制作されており、平沼が 1919 年に実見したのも 1878 年の模造であると思われる。

本作では、光明皇后と従者、その背景に《鳥毛篆書屏風》が描かれる。君主座右の格言を鳥毛貼りの篆書と、緑青あるいは丹の楷書とで交互に記し、楷書部分と下絵は吹き絵で表現した《鳥毛篆書屏風》の特徴が精密に捉えられている。屏風の背後には浄土を象徴する蓮池がのぞく。光明皇后は法要で使用する柄香炉を手に捧げ持ち、亡き夫を偲ぶ姿であることが示唆される。

同作家の収蔵は初となり、また当館で初めて収蔵する屏風となる。大正期らしい清新な日本画の潮流を感じさせる良作であり、平沼の初期の作風を知るうえで貴重な作例であることから、当館の収蔵作品とするのにふさわしいと考えられる。